

賢女
全傳
千代物語

四

^ 13
3037
4



へ 13
2037
巻 4

千代物語 語卷の四

目録

○ 建弟永三希室の津へ通ふ

附 千代女練言のり

○ 千代女おのゝ人の大夏を借る

附 遊女尾上自害のり

奥村志政房画

五ノイテ



山陽千代物語卷之四

東都

鼻山人著

(七)

建部永之希室の法へ通ふる
時、千代女練玄のころ

人の身不図をうり雑面ゆゑのふある一つをぞい悪しと扱ひ
 ひまらやふるふ援州小塩の城を赤松則房の殿
 長不建部永之希とのいふ者ありや生憎くさるく
 りと矢をく名ある侍士ありたるがは程より室の

つ ありえ ありえ
 津ある尾上お押のひ付く日毎小倉の砂金のはく
ありえ
 通ひあへず彼の是のと物まればとも尾上は官
ありえ
 子代小のまはり結ぶの神懸りおのひ深あへん
ありえ
 おさくありえのちせりうたれが永と糸の押おのひ
ありえ
 糸増く通ひのちが後あり男の急事此のまひ
ありえ
 うそつてあふいむむ色もあるうろふ代もある付り
ありえ
 永と糸とお金とく種ぐ世の物の治りおのひとあく
ありえ
 切るれ親しとともあり信ぐとの人ともありを相あふ
ありえ

ふ代四ノ一

面々温和ありて心の中お我をほるまらず然も男
ありえ
 あつと種懐厚くうたれざる代へんの中お押のひ
ありえ
 かつら先ッ頃より防州の風姿を窺ひ種ふる定
ありえ
 父さるぬもアノ 柱鬼が後まの舌改おそつて今へん
ありえ
 妻ふなるまへともありあひつらん物ぐは何年しと父
ありえ
 母の仇雷右門をト太刀ありト怒えんとおのひとあ
ありえ
 儼々女子のまひありいりふのて我き徳目する男
ありえ
 老を捨らひんやめまをともまをやトおのひの治り
ありえ

永三糸が妻不頼母しきんぎよ連れ昔中懐
 をの増り像のよくづまぬの増らひをもほして一十夫
 るの増るをも散さちやト増のひ付るが或後いそ
 久とくふ代はつものトアふ臥くるふ少し増らる
 聖女の肉あく永三糸が妻しと懐き増のれが不作
 うふ野まで杖ふ難固も道あるぬ悪あてふまほく
 増の増ら万の客ふ懐を賣らうま女ありトハ増の
 とも杖ハ又依のふまて妻人と増のふま増野まほく
 増の増ら

あはれノ二

心をのさすふとの思我をも杖すいよく初辱
 とあるもの思増はけ任の身の面固あ杖君
 ちとくふ代はつものトアふ臥くるふ少し増らる
 永三糸の懐紐し抜て尾土が強えふ増らる
 あくは妻ち小判報さんいまあひまぬか
 草で押ゆりコハ消うらぬ由他業うま像のあら
 したるの思増あはれあうづー先増し某ふ免し

宥ゆるしの中ちゆうづぎるのありト之を永と希白みを
おきりの徳と和じたけ行たを市目不怒ゆり又之の
倡けい妓ぎゆへ不令をといふさんの由らんの程めりがく
あられど解あり難は女わか會あ敷の面つきの後あ
すまふの後あは是惟あく邪儀らひゆとすんだ尾え上り
後あも心あらず事也へあくさくゆち中ちゆう通とう由をを
婿むこひあらずまるゆへあらねばも昔後の外わふ二せま
でもとらひ智たる夫のゆへ川竹の下よ夜の誓ちかう

あはれに

ハいふふせん又とととととの世をハ智ままト抑のりハ
物ものら今又い由ゆふ不怒ゆとのあらじと燭のりあらじをを
破やると抑のりあらじといふふ代ちへあらじの物をを
破やると抑のりあらじといふふ代ちへあらじの物をを
只ただゆるのも我不あらじといふふ代ちへあらじの物をを
お向ひ是まあらじといふふ代ちへあらじの物をを
身みを妻不あらじといふふ代ちへあらじの物をを
欺くまあらじといふふ代ちへあらじの物をを

して尾上が市んお通ぐりて申すはなほなほりびびり
 舞の夜りての比よりけしむ市出ゆへに
 日頃の市おのひを晴まきせし中野中野あかど
 も遠いゆへ尾上よりておれお市んお通ぐりて
 その市をさやぐりてその市は是はあかきまきせ
 ゆべきとたりの小坊の尻際より自分お管切て血お
 流し申すをさやせぶ永と申す大まお通ぐりて
 昔年の教母さき市んお通ぐりておれお市んお通ぐりて

市出ゆへに

くの市縁もあゝ又斯めの市はあかきまきせ
 市んお父母の送物を破りておれお市んお通ぐりて
 市んお武士しておれお市んお通ぐりておれお市んお通ぐりて
 市の市はあかきまきせし中野中野あかど
 けしむ市出ゆへに
 勢ひさるる市んお通ぐりておれお市んお通ぐりて
 市出ゆへに
 市出ゆへに

ほらんは後の繁りの程も其れが結びまゐるを
まげと御方の夜約を遠くまで流しせぬと
糸を糸の横を打実ふ下方あるぬ由情の如
あざらゆゆの捨るまげや御方の夜約を
附しまぶる尾上かろゆの兵あ捨てまぶる
いぞ其れ程の難事を御まゐるまげの
疾あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
上が備をくやゆも危きことじ其れを
あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
尾上かろゆの兵あ捨てまぶる
いぞ其れ程の難事を御まゐるまげの
疾あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
上が備をくやゆも危きことじ其れを

あぢりゆゆ

なごりゆゆの程も其れが結びまゐるを
尾上の兵あ捨てまぶる
あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
上が備をくやゆも危きことじ其れを
あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
尾上かろゆの兵あ捨てまぶる
いぞ其れ程の難事を御まゐるまげの
疾あぢりゆゆと喉をへし出たりぬが
上が備をくやゆも危きことじ其れを



あらん妻おの霞あきましあきたるのありぬりまづるしりてを
 ちよちよひ代ひ代のきしりのともゆきす香しりが支那せんの洞
 流りゅうし永えい三さん市しどの邸ていまでもおんお
 んまきししゆふを解とく糸いと糸いとおちるあもの年としき我
 史しあれげん身の御みをゆきしゆく明あきくまきせん
 昔むかし信のぶのまの周しゅう防ぼうの國くに大だい内ない家けの家いえ長ちやう美み川せん
 強ぢやう心しんといふ者の娘むすめあて名なをちよひ代ひ代といひ先まへの頃ころ
 中ちゆうあふふががくらまきあわたりあわたりかろかろあしを
 赤あかい父母ふぼの植うゑ鬼おに何なに某あつおじがされるい何なに率りつその

あ代に七

飯いを付つくじまへふお向むかんとおのいどの女子むすめの身み
 ちよひ代ひ代のふお甲かう斐ひ又またあく実まことの父ちちお尋たづねあきく
 将しょうの身みを寄よその中ちゆうお然ぜんるべきいづの教しやく母ははあ
 人ひとあがけ依よを明あきし一ひと大だいるゆを愛あいまんと彼か小せう男なんの女むすめ
 とありけ家いえお豆まめをいむらちおんおの下した方かたあぬ
 免めん角かくし七しち日を送おくるお測そくらずも永えい三さん市しどの相あひ儀ぎお
 ろり実まことある武ぶ士しの魂たま神かみをえ布ぬけなれば遠とほくけい人
 我わがおんて社しゃとおのひけりはるれどもた右みぎあくちよひ

汝も明入るものさあれが今日までい何なるものさあ
らうるぬ夢ふ彼人の身かかかのと玉の結の子
まじりていづくかのひ深きまじりていづくかのあ
かぬを結て彼らふ遠くをその後にはははは男子の
縁をいづくか結らひるがやう遠背の志すふまじり
あつ入るまを杖を男と扱ひのふがあはれかあどは
うらぬ情をばさるるまじりてを扱すうらぬのま
後まのまはれあれが何事永之希どつらんまはれがひ

女に

昔の夢をいづくかまじりてを扱すうらぬのま
あれが何と女のまをいづくかあはれ情とあはれらんと
いづくか尾上の扱ひもあはれまはれまはれ扱す一羽も
あはれら情もあはれまはれまはれら情とあはれら情と
何と飛渡す女子のまをいづくかあはれまはれまはれ
あはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
あはれら情とあはれら情とあはれら情とあはれら情と
あはれら情とあはれら情とあはれら情とあはれら情と
あはれら情とあはれら情とあはれら情とあはれら情と

うら 一と決あからふやなれがみ代はるぎのやど
く ぬきくもあう 舞くあやのふらむ舞の夜はそく昔
一大さゆきあ明て永三希とのお愛をやトその夜は況
お天明され尾上へ舞うはくぐとあひの信も品
夏のまじりてくもてまよふ人たゆあうりくる

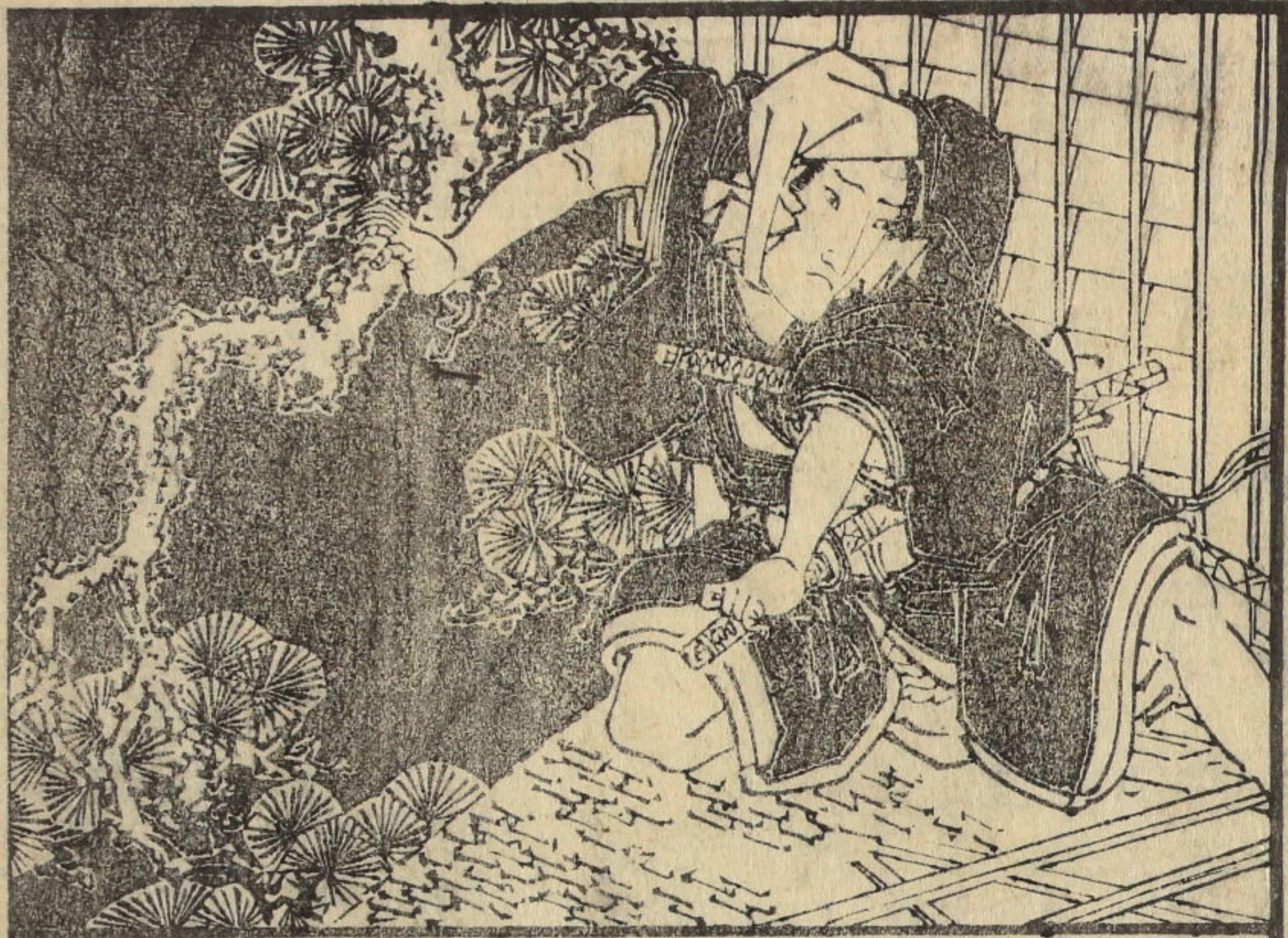
八 子代女おのうの大事を流るる
けり 狂女尾上自害のま
今日も浮世の黄昏の鐘が怪の賑りをるる

あ 永三希の只み代がほまいるぎを感で酒肴をん
ど持せき砂盆がけりあなれがみ代は尾上へ出向
せと供茶一湯くお中あまみ 尾上あめらけがらせ
ゆれが今も内お持ははのちおのひをの晴ちれお舞の
まの指うひてあやせあまら永三希の今ま
あまら 只れんあのみぎの程のあけあををけの
そらり 舞一あはすのミトまより行司を散
あふ入と舞の舞うるあづる程あ永三希の舞く

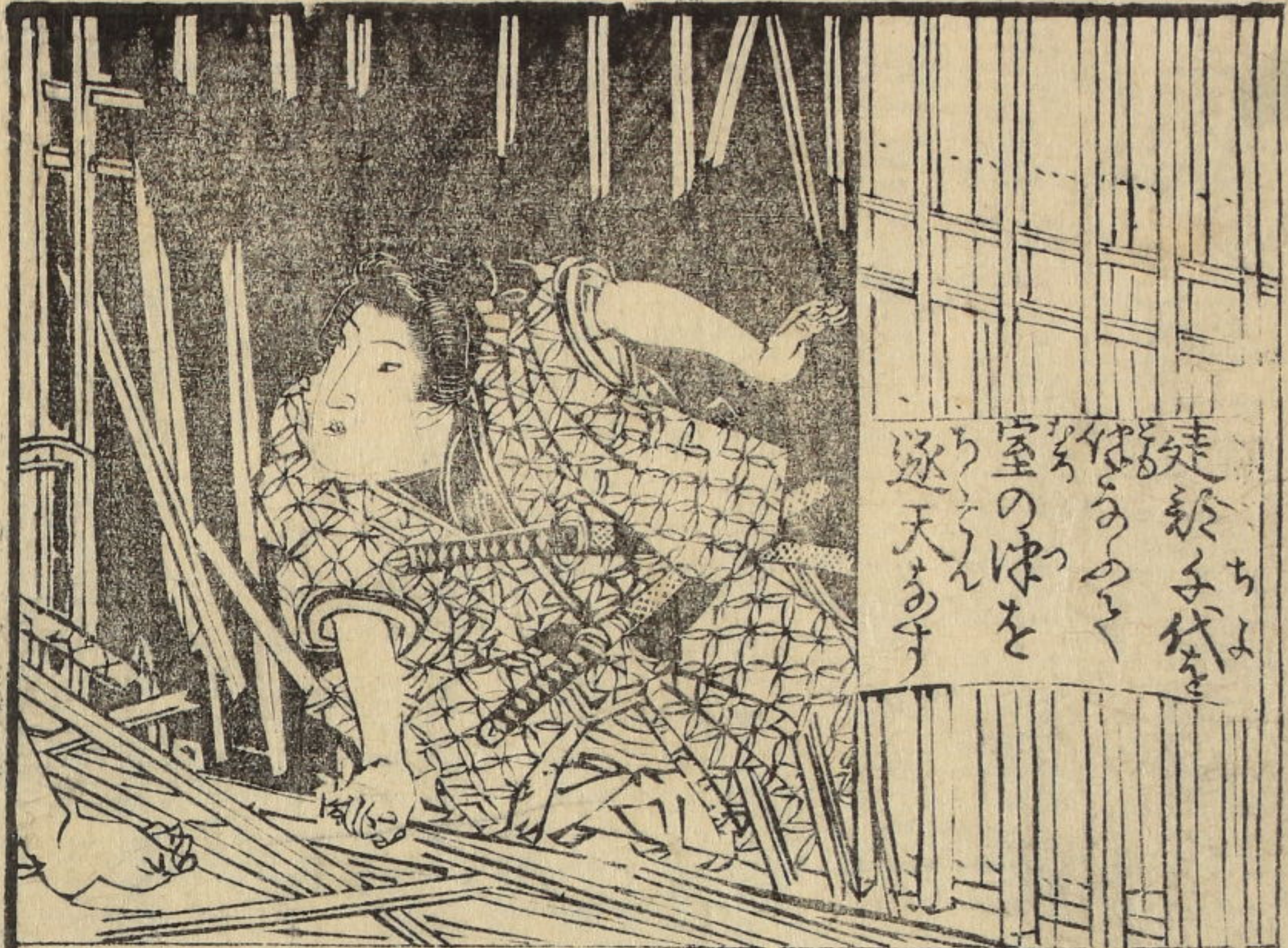
生田斐もさ兒川竹の身入りと罪深しと夢の歌
淡まゝにるのト必死若世の業被るを也とこれ海
るの未来を縁あらば夢生男子の佛星を
頼しこれ返毛くもたるの必死若世と夢の歌
らひを夢一のひて夢の人の二たるをの深くあらし夢を
南無阿弥陀佛といふも必ずみ代が根え抜ぬと
咽かガワと実貫き十九の巻を一朝にしては世の夏
をぞ夢一なるさればは里仙某が寺小塔の原を

春野上

と
結し真亮方姫信女と後の夢をとも人の風評と
結しつる子代は国草か山とれとむまや叶ふとてくも
あらはるるを舞もはるるの夢成やして我大を
夢えり結して切らると涙をいりこらぬ体あく永
と希ふ白ひ尾上りゆふふゆふの花あくくは
結るる出でて舞のうらむしとて永と希刀引提く
左出ると小屋上の白雲とて結るる臥居るれやコハ
いつか結るるの寝然とて作ををれやみ代は永と希が



お出やと聞はされぐら
 子細のゆ父あて葉の國
 ちて人のあふはね音
 女子あがらぬ奉るぐら
 義ある人もあらば命を
 捨らひまゐせ父の敵を
 奪つ地のひまがあらば
 尾上小右あつちのひを



走於子代を
 ばあつとく
 室の味を
 逐天あす

傍近くなつて是あて果
 しが切てまゐせし指の跡
 布まのり今あゆをう包
 ぐら一昔海へ男あてゆを
 実の大内の家長を川
 山と云者の娘あてゆつ
 永に希いゆくふ宙あ
 せれいゆふ又男の姿あ

られ君と相知りまゝにせより涙あるは心の中をも
知り何事は一たりの心を導きまゝにせよ切ある恋の
由媒ら致せし由実ハ我大望を導きまゝにせよ
し然る不尾上ハ我身を月一女子と知りしより
妻を味まゝと身を捨て君像と君が縁を結
まゝにせよ一たりの心は不依りたる女子の心を助けたまふ
妻の義理と我が一たりの心は不依りたる女子の心を助けたまふ
命を捨てし心を不依りたる女子の心を助けたまふ

あかぬ十三

介抱して一たりの心の望みを導きまゝにせよ
叶ぬるもあふ尾上がはみ伏したるその心は
青くは結ひの心は切る面色も来り希
大なる感下供も信は身の上より導きまゝにせよ
此のまゝでも困小舟にせよその心は不依りたる女子の心を助けたまふ
上が来來の信もあともぬらん教もあつぬともいふ
我人の後見して教の導き命を捨てし心は不依りたる女子の心を助けたまふ
夫ハ懐は我像もあつぬらん由導きまゝにせよ我風おのてふ

満ていひつゞくふ代へ品々を合せて傳へ赤代の縁
 ある目足まで傳へる又殊善養の所利をさるる
 おもろくおぼへ入り尾上の覺悟のしるべき
 あればはあふおれあれども地ん身法ともいふああり
 てお後の程もいふありお後あがらも尾上がけ
 死骸ははばけおす捨盡る玉の程も身を思ひ時
 節を待ておす急をさすおさんと察しお耳きする
 おぼく実くお困おらうくとおぼくおおあらす

ござせのいと二腰早雙くくあつてもおぼく獲て後
 お紛はは家々を密らふおおの山はより捨ははたか
 請へお請へる今お女の中の慶くあつぬとそふ代へ男
 の姿を認るおお前の糖へお立ぬり終る永三弟
 まあぬの程らひて侍平ら清書を待たし
 びたう請ふさあつてお代へ父母あらびおまお尾
 上が菩提のあつたと毎日経を讀彌くつま方
 もあれんを逃るを欺きおのいほつてけい

なまきのるまの教とひそく銭をうり

あつちのちのちのちのちのちのちのち

ト 徳にせめてのちのと徳れあひらるるちのちのちのち

比建邦永三希の先つじふ昔やと支那不別是今

孤独の身あれバ万端ん安くと徳のち代か福うひふ

まのせと那とせと徳のひらるとりや

千代物語卷之四終



千代物語

